

IV 調査の成果 (その2)

はじめに

花巻市の中央部を南流する北上川の東部を行政区では、矢沢地区と称しており、この地区は北上山地西縁の山岳丘陵地を形づくっている。

「経塚森」、「寺場」の載っている地帯は、一連の山並みを景観として保っており周辺の低地よりは比較的傾斜のなだらかな丘陵地となっており、北上市側より続いた安山岩を基盤にした岩石層である。この東側の東和町・石鳥谷町方面へ向うと花崗岩質岩石からなっており、際立っている。

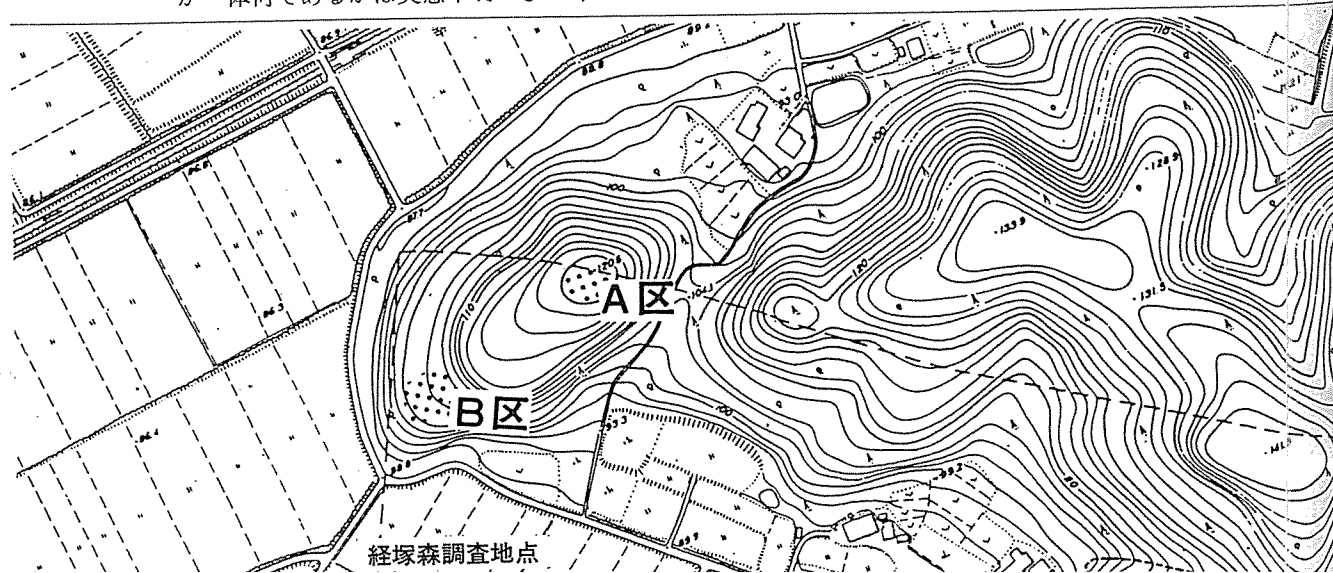
このことは次の「綱森」の場合でも同様のことが言える。「綱森」の載っている山地は極立って高くなっており、周囲から隔絶している。しかし、基盤は南方より続いた安山岩によってつくられており、その末端部に位置している。

57. 経塚森

文政頃の著とされる和田甚五兵衛氏武による和賀・稗貫二郡に伝わる民話を集成した『二郡見聞私記』の「高松の古観音」の項に次のようにある。

鞍かけの坂の上より東を見るに真丸なる松山あり是を怪ヶ森といふ。昔し旧高松寺の繁昌の節此山の頂に法華経一石一字書写して納し処也依て怪ヶ森と云となり。……此山の続き西北の山下に矢沢村立石の金右エ門と云者……。門前へは出ずして山の平に行ければ助四郎申すには左様御出候得ば経ヶ森へ登る也……………(『南部叢書』第9冊)

この経ヶ森(怪ヶ森)について、地元ではチョーツカモリと称されているが、経塚の存在そのものについては知られておらず、風聞の域を出ないものであった。「高松寺跡」の北方を流れる高松川によって形成された沖積地をはさんで対峙する丘陵台地の突端から伸びる尾根に沿って北側は旧矢沢村・南側は旧高松村となっている。字界ともとれるこの尾根づたいの塚状遺構が一体何であるかは実態不明のまま、今日に至っている。



<調査結果>

頂上部の標高約120mの地点をA地区とし、2基の塚を東側からA-1号・A-2号と区別しながら、A-2号について試掘を行っている。A地区と次に述べるB地区は、一般に経塚森の名で地元の人々に呼ばれており、丁度尾根の頂上部に東西約50メートル離れて2基の塚がある。

このうち、A-1号塚は東西約7.5m、南北約7.0mのほぼ円形と思われる形状を呈しており、周囲との高さ約0.6mを測る。中央頂部には盗掘かとも思われる落ち込みがある。東西方向にダ円形状の尾根頂部に、周囲からそれとはっきりわかるほどの塚状遺構である。

A-2号塚については、東西約6.0m、南北約6.0mのほぼ正円形で周囲との比高は、約0.75mある。A-1号同様尾根頂部の西端部に位置し、東西ダ円形状尾根に載っている。

A-1号とA-2号は、尾根の両端に対峙している形になっている。従ってA-2号についてのみ試掘を行っている。

A-2号の東南部約4分の1を発掘したほか、北側と西側に小トレンチを入れてみた。その結果、この塚には最大上幅約1.2m、最大下幅0.8mの周溝が巡っていることが確認されている。深さは最大で約0.2m以上ある。

周溝の埋土は、大きく3層に分れ、上から暗褐色の軟らかい層、その下に明褐色の粘性を有する層が続き、最下段に軟かい灰黒色土をもっている。

塚の封土は、上から表土の黒色土、暗茶褐色土、そして最下段に黄褐色の小礫を含んだがりの固い層が入って来る。

また、この塚の中央頂部には、半径約0.6mの範囲で円形に0.1m~0.2m程度の安山岩が集中しているのが確認された。いずれも破碎岩石であり、大きさや方向などに規則性は見つからないが、周辺にはなく頂部のみ約0.5mの厚さで堆積されていた。

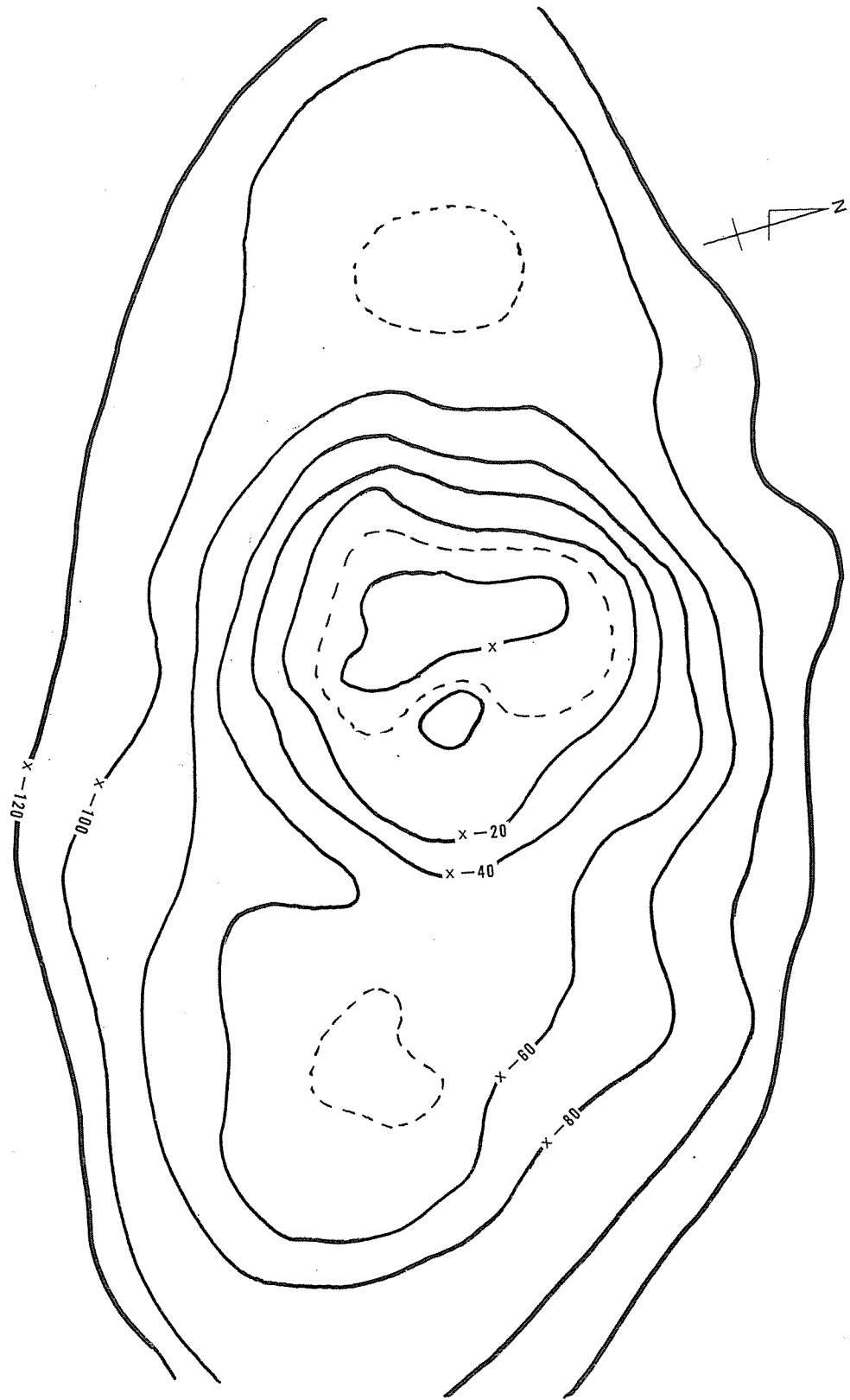
今回の調査の性格上から、この集石部についての調査は実施していない。従って構造、内部のつくりなどは不明のままとなっている。

しかし、出土遺物は数点検出されているので図示している。封土中のしかも裾部からのものが多いが、内黒土師器の破片である。ロクロ整形が施され小破片のみという特長である。

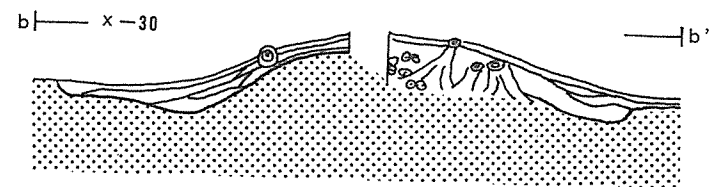
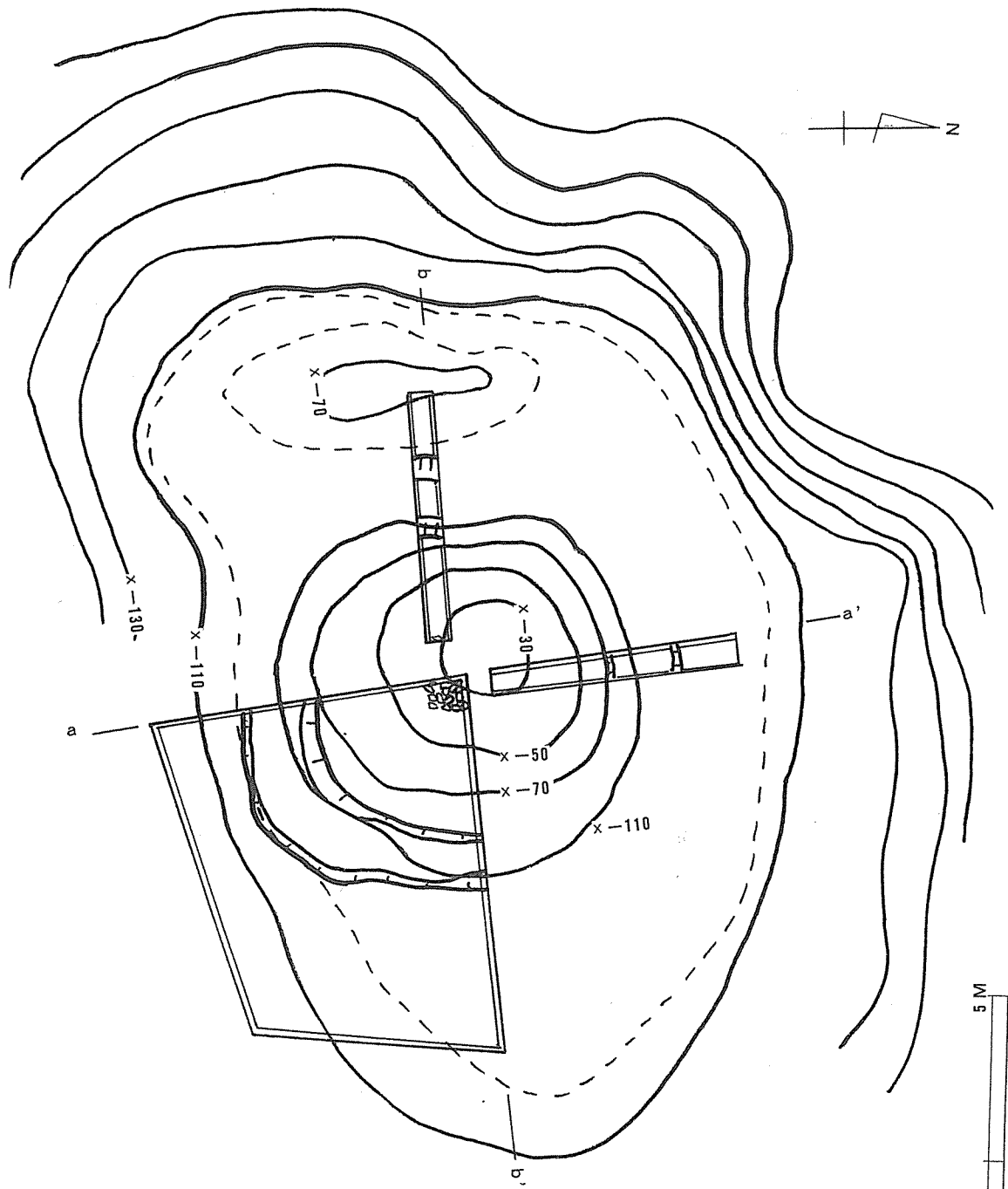
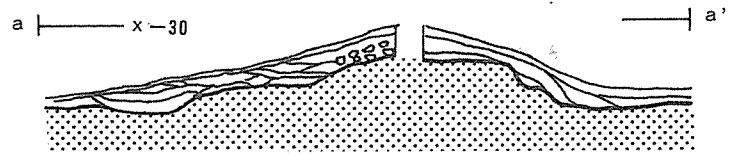
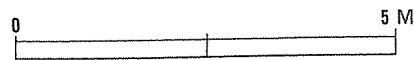
周溝内の埋土からも同様の遺物が出土しているが数は多くない。

A-1号の中央頂部の落ち込みや土地の古老の言によるとかつて盗掘されたもの、何らの検出物が無かったということである。A-1号とA-2号は共に同様の規模、構造を有していることから(A-1号にも地形測量の結果から周溝を有しているものと考えられる)、同一性格の遺構とされる。

時代的には、出土遺物から10世紀以後のものと考えられ、高松寺跡との関連も考慮されるべきであろう。



A-1 号实测图



A-2 号实测图





経塚森遠景 (西側より)



A-1号塚現況



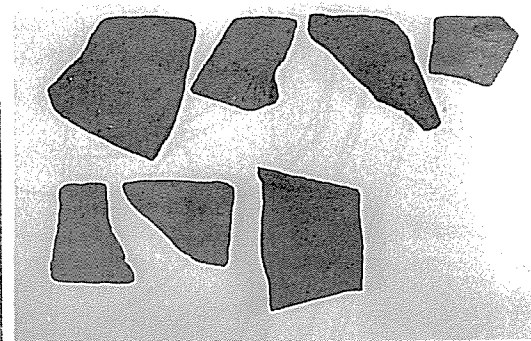
A-2号塚現況



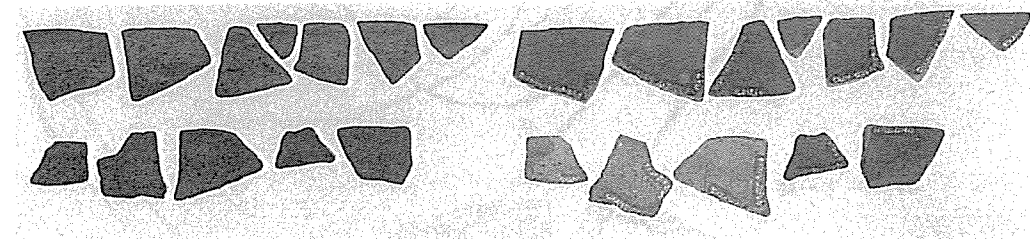
A-2号塚主体部集石



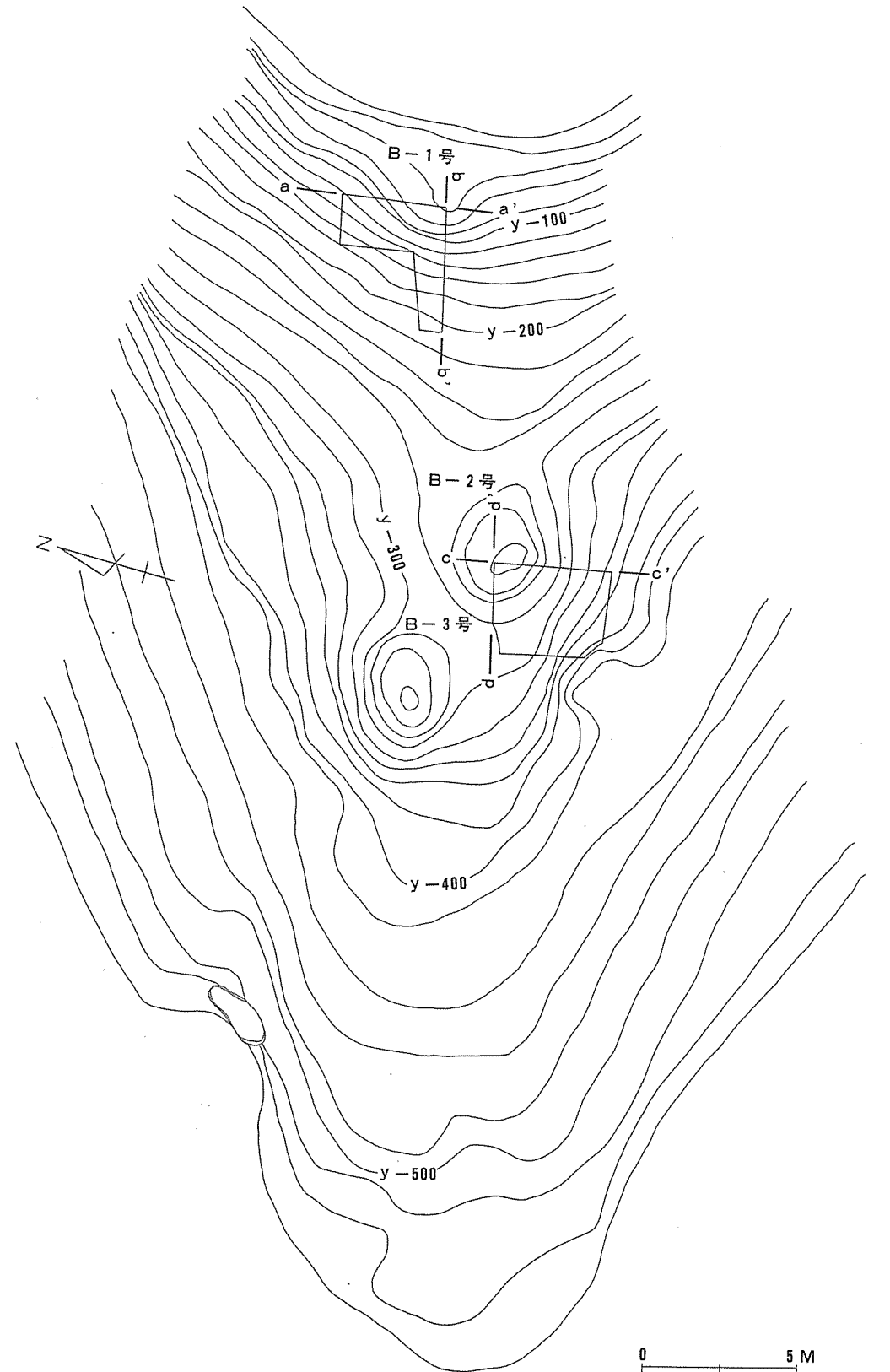
A-2号塚周溝



A-2号塚封土中出土遺物



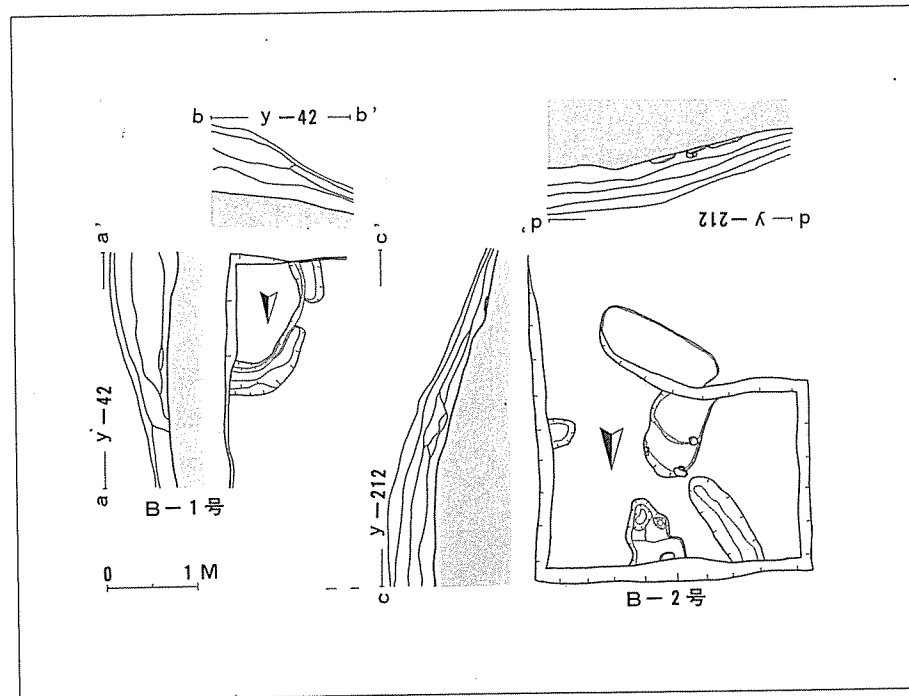
A-2号塚周溝埋土出土遺物



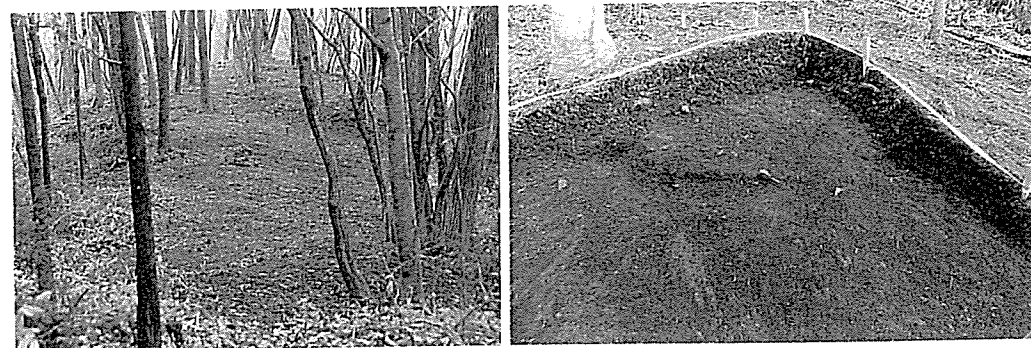
B区地形図

A区とした尾根頂部より標高約20m以上低い地域の調査区をB地区とし、そのなかの塚状遺構3基のうち、2基について試掘を施した。

そのうちB-1号については、急斜面での塚ということでもあり内部の構造については特に人為的なものは見当らなかった。出土遺物はない。又B-2号については、A-2号同様4分法で調査したが、南側に0.1m以下の周溝状のものを検出したが、地山面がこの地形をつくっている特有の稲瀬層の岩石のため一定せず、はっきりとしたことはわからない。出土遺物は土師器片が封土中より出土している。

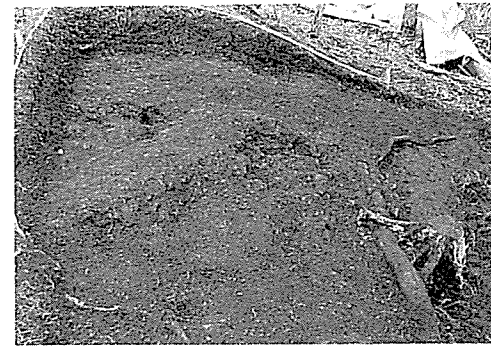


B-1号 B-2号実測図

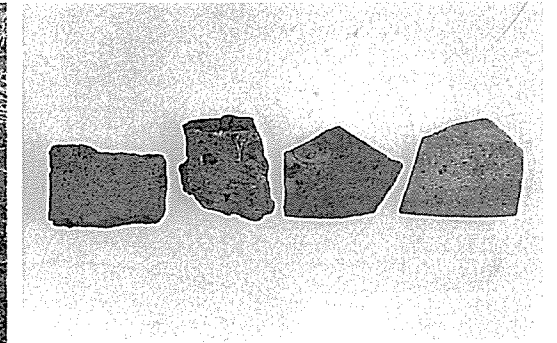


B区現況

B-1号塚調査状況



B-2号塚調査状況



B-2号塚出土遺物

58. 寺場

標高90m以上100m以下で経塚森の低位の地区を指す。経塚森の下にある数軒の民家が含まれている一帯で緩やかな南向き斜面乃至西向の斜面となっている。

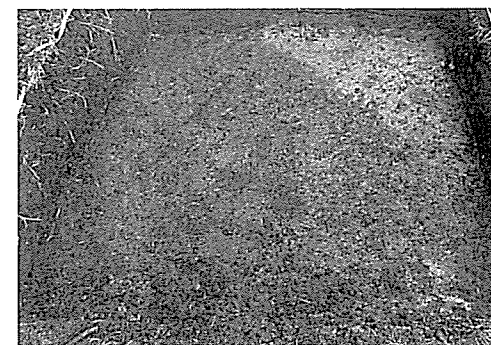
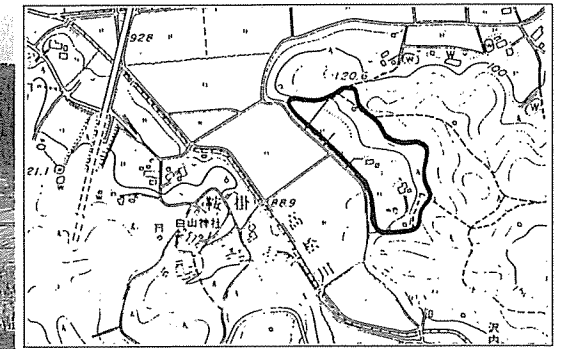
経塚森の直下といえる地点に試掘を行なった結果は、竪穴住居跡の検出、それに多数の土師器の出土を見たところである。

このことは、近郷の住民が畑地作業の際かつては往々にして出土遺物があったとして大事に保存されており、明らかな集落跡として考えられた。

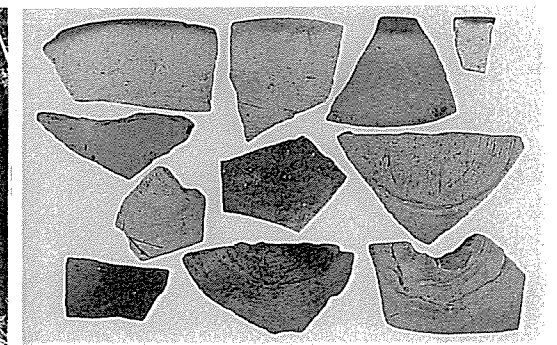
経塚森と同様の時期を設定できると思われる10世紀以後の遺物である。



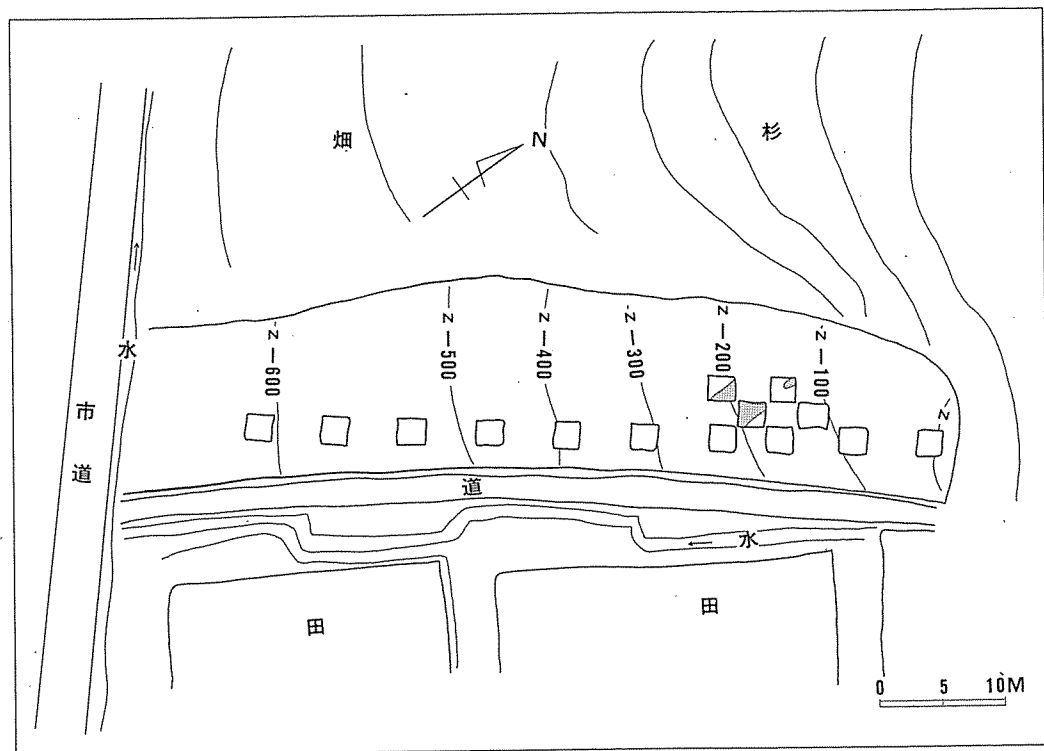
寺場遠景 (南側より)



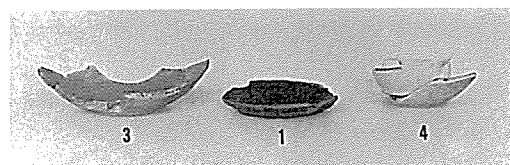
遺構検出状況



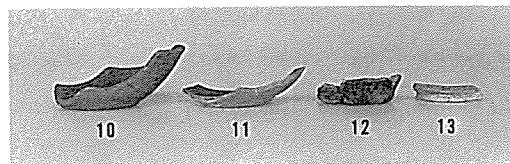
出土遺物



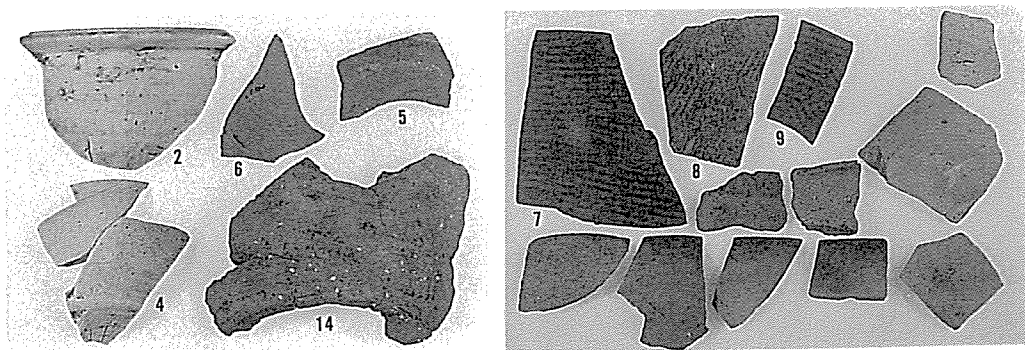
寺場試掘グリッド配置図



出土遺物

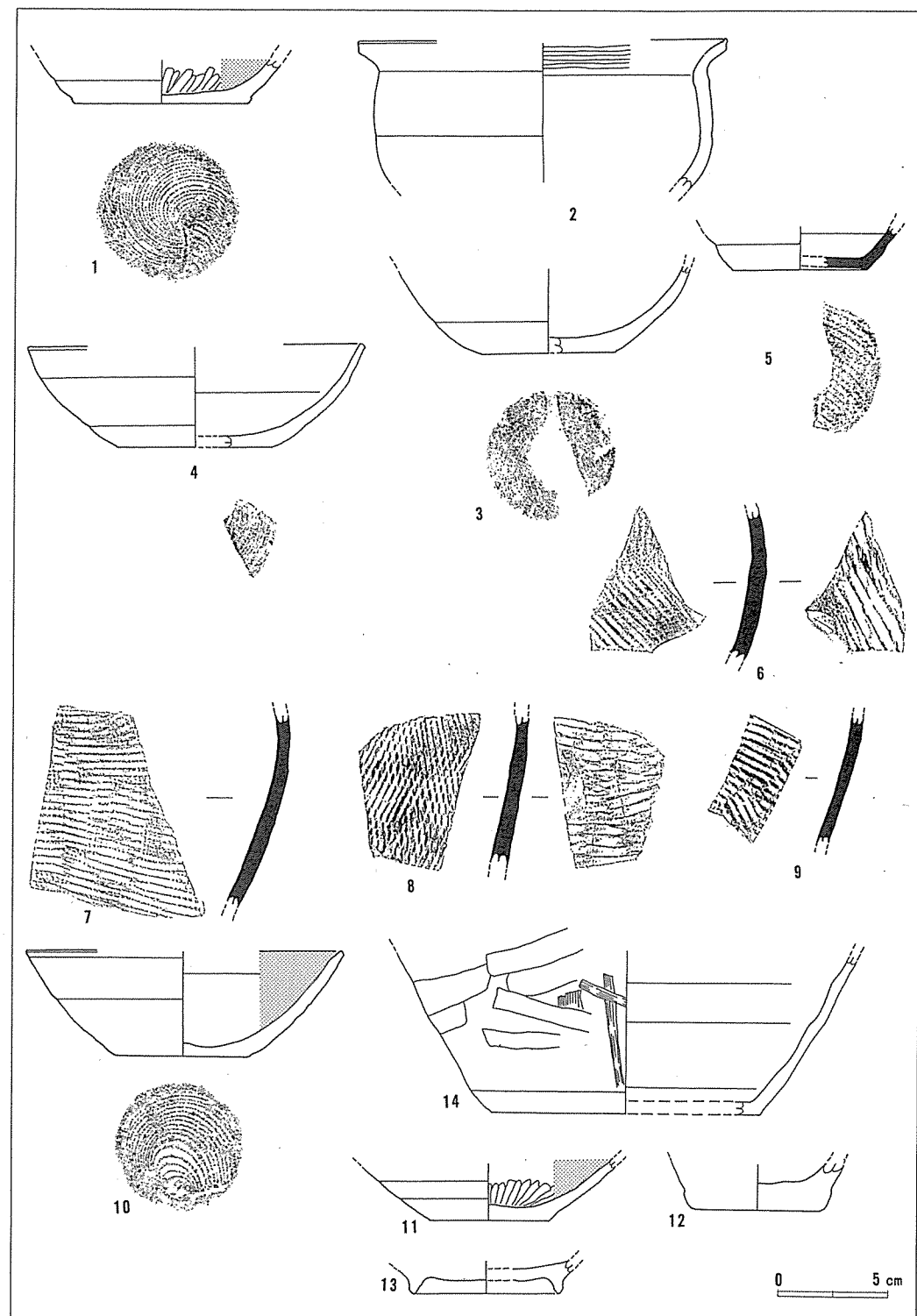


個人所有



出土遺物

個人所有



寺場出土遺物

59. 綱 森

標高213mの通称綱森と称される小高い山の頂部に、塚状遺構が2基並置されている。これが綱森と断定できるか否かは土地の住民の言によって定かではない。

東側の塚を1号とし、西側を2号とし、2号塚についてトレンチを設定してみた。

1号塚と2号塚は、距離約5mの間隔があり、ほぼ東西方向に並置している。1号塚は、東西約7m、南北約6mの方形状を呈しており、周囲との比高は約1.1mある。西側に取り囲んだようなや、落ち込んだラインがあり、周溝状になるものかも知れない。封土中に処々に大きめの安山岩がゴロゴロ積まれている。

2号塚は、東西約5m、南北約5mのほぼ正方形を呈しており、周囲との比高約1.1mを測る。2号塚は、封土一面に安山岩が露出しており、あたかも積石塚の如き外観を呈している。巾0.5mのトレンチを南北方向、東西方向に入れて構築状況を見てみた。その結果は、塚頂部より半径約1.5m~2.0mにわたって、主として0.2m大の安山岩が表土をおおっており、それより外周では集石がなくなり3~4層の土でなっている。浅い周溝が巡っていて出土遺物はない。

これらの塚は、地元民では「山ノ神」としてあがめられており、定期的に参拝の対象となっている。1号には「綱大明神」、2号には「産神」と書かれた石碑が建てられそれぞれに見事な松木が生え、信仰の対象であることがわかる。

北側を見渡せば、一字一石経を埋めたとされる高松山経塚があり、それらの関連で地元の人々の間ではゆかりの綱森と称している。

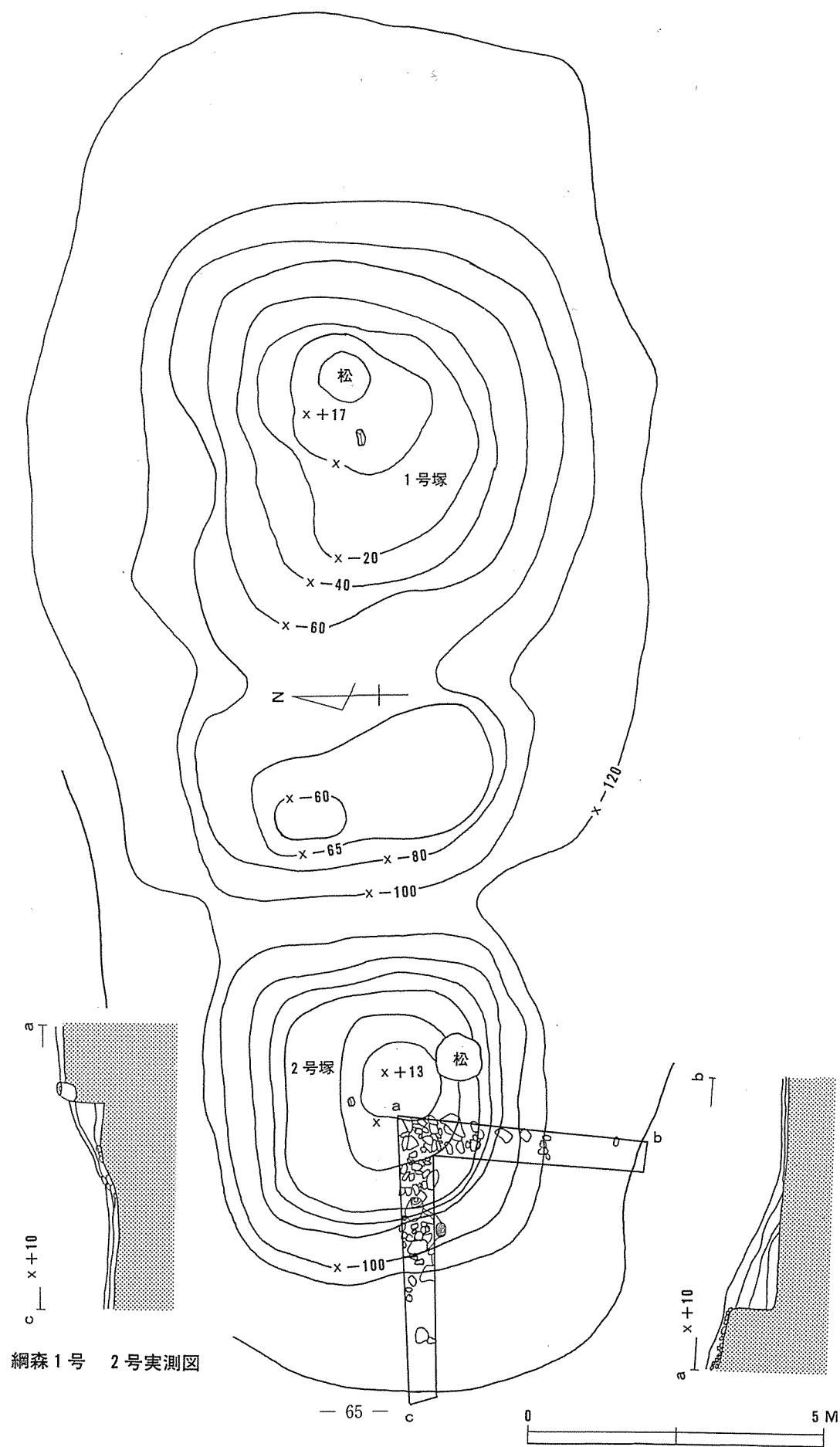
これらが、間違いなく綱森と断定されるならば、文献では既に出土品があったことになっている。即ち「小さな瓶」がこれである。(『猿ヶ石叢書』第39輯東和郷土研究会昭41)



1号塚現況

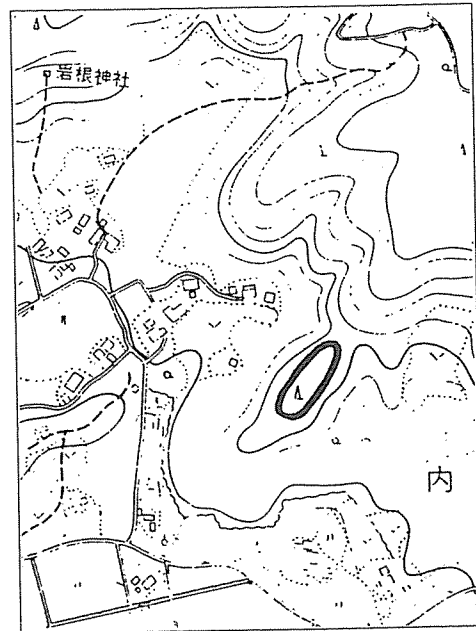


2号塚現況





2号塚トレンチ状況



つまり「肩周54cm、底8.5cm、口径8~9cm、高さ20cm」の「陶器の瓶は色彩は濃暗緑に釉薬を以て焼きつけられて居るが、轆轤を用いられて居ない様であって、其肌は粗らく手づくりみかではないかと思われる」(原文のまま)として図示している。詳しくは、今後の調査にまたなければならぬが、現在、市指定文化財となっている常滑焼の壺に近いものである。

まとめ

経塚森から寺場そして綱森は、標高の違いこそあれ安山岩質の山岳、丘陵地であり、北上山地から西方末端部に伸びた地点にある。地形的に非常に似ているこれらの場所がいずれも経塚乃至それに関連する伝聞のあることは興味深いものがある。又いずれも北上川の東部に属しているということも関連性があろう。

経塚森の存在は、今後更なる調査によって解明されるべきであるが、周辺が既に集落跡としての出土遺物・遺構の検出をみていることからわかるように、既存の資料の検討がなされる必要がある。

綱森については、同様の地形をもった山並が高松地方には点在していることからもっともっと調査を繰り広げる必要があろう。

V まとめ

今年度の調査地区は、矢沢地区については比較的資料が従来からそろっていると思われたにもかゝらず、新規発見が相次いでいる。JR東北新幹線「新花巻駅」を拠点にしての観光開発に着目してのリゾート計画が集中してきている。

このことを念頭に入れて、始めて丘陵・山岳地まで踏査し更には試掘まで行なったところ、資料調査不足と相まってつぎつぎと新たな知見を得ている。平地での開発行為が一応限界を見たことからくる標高の高い地点での開発は、踏査だけでは不十分であることは否定できない。

しかし全てに試掘・発掘調査を実施することは不可能であることからタイミングをとらえての分布調査の必要性をあらためて認識しているところである。

矢沢地区の山岳丘陵地は、隣町の東和町・石鳥谷町・北上市との関連で古代仏教寺院について検討する必要がある。「経塚」の存在や伝説としての古代寺院跡の存否について、丹念な調査を連携しておこなってみることが大切だろう。

花巻市としての発掘が、北上川の西側については殆んど開発し尽された感がある現在、河東の矢沢地区に開発が及ぶのは必至であり、現実に賢治記念館を中心とした観光開発で胡四王山は殆んど賢治の時代をしのばせる山並ではなくなってしまっている。矢沢地区については、今後も継続的に調査を繰り返すこと、なろう。

宮野目地区については、先述の如く平坦地で大方水田などによって開発されたと言っても過言ではないほどに、土地利用されてしまっている。

しかし、規模の大小はあっても、遺跡の新規発見をみている。このことから、従来の観念にとらわれないかたちで分布調査を行なう必要があろう。「方八丁」という地名の存在などもかんで当該地区での丁寧な調査が期待される。

最後に湯本地区での遺跡分布状況であるが、この地区では遺跡が西部丘陵台地縁辺部に集中しているのに対し、平坦部の東側では確認されていない。もっともこれは、地元郷土史研究会などの調査によれば水田区画整理事業の際に主として縄文土器の出土をみており、地区公民館に展示されていることから、遺跡の存在は確認されるであろう。

以上、北上川の東・西岸及び瀬川の北側についての分布調査では、相当開発行為が繰り返されていることが確認される結果となった。今後は、あらゆる開発に的確な対応ができるように更に資料の著積を図って行くことが望まれる。